

# おくの極細道綺譚

横山 峯雲  
よこやま ほううん

「月日は百代の過客にして」で始まるご存知の松尾芭蕉先生の一世一代の名作、『おくの細道』。真筆本が発見されたのは一九九六年のことである。当時、峯雲は職場の同僚や外部の仕事仲間と俳句会を結成して、句会はもちろん、吟行と称しては温泉地へ遊びに行っていた。当然のことながら、『おくの細道』の真筆本の発見が報じられたときは、同人の間で大騒ぎになったものである。そのうち、岩波書店から『芭蕉自筆 奥の細道』として影印の写真付きで刊行されたので、同人仲間と早速、近くの書店に駆けつけて購入した。峯雲たちと同様の方が多かったらしく、ほんの数冊しか残っていなかつ

た。ところで、奥の細道は題名の表記が様々にされているが、自筆本と言われるものも昔から数種類発見されていて、そこに記されている表題が使われているに過ぎない。今回、峯雲の旅の題名は、真筆本に表記されている『おくの細道』に敬意を払って、峯雲などは細いどころか、さらに細い極細なので極細道とした次第である。

さて、真筆本発見から数年ぐらい経った頃、俳句会の温泉旅行にも飽き足らなくなり、入社したての頃、休みの日にはよく同僚と八ヶ岳や北アルプスへ山登りに行っていたことを思い出して、そうだが、句会で見学した深川の芭蕉庵から芭蕉先

生の足跡を辿って見よう、と考えたのである。ここはやはり芭蕉先生と同じく歩いて行かねばなるまい。山に比べれば平地なのだから、近代交通手段を使って物見遊山では芭蕉先生に申し訳ない。

深川の芭蕉庵から、芭蕉先生は船で千住まで行っているが、わたくしは残念ながら船を手配してまでは出来ない。そこで、隅田川沿いに、出来るだけ川の傍を歩くことにした。

この文章はすでに深川を出発してしまっただが、自分もやって見たいと挑戦したい方のために、峯雲が参考にした資料をこっそりと、いやおっぴらに開示して差し上げよう。

月日は百代の過客として行かふ  
 年も又旅人也舟の上を生徒  
 をうかへ馬の口とらへて老をむ  
 かふるものは日々旅にして  
 旅を悟とす古人も多く旅に  
 死せるありいつれの年よりか  
 片雲の風にさざはれて漂泊  
 のおもひやます海浜にさすらへ  
 て去年の秋江上破船に  
 菊の古果をほらひてや  
 年も暮春改れば霞の空に  
 白川の関こえむとせうかみ  
 の物に付てこころをそぐるはせ

月日は百代の過客として行かふ  
 年も又旅人也舟の上を生徒  
 をうかへ馬の口とらへて老をむ  
 かふるものは日々旅にして  
 旅を悟とす古人も多く旅に  
 死せるありいつれの年よりか  
 片雲の風にさざはれて漂泊  
 のおもひやます海浜にさすらへ  
 て去年の秋江上破船に  
 菊の古果をほらひてや  
 年も暮春改れば霞の空に  
 白川の関こえむとせうかみ  
 の物に付てこころをそぐるはせ

おくの細道

おくの細道



『カラー版芭蕉「おくのほそ道」の旅』  
 金森敦子著角川書店刊、これは解説と一  
 緒に道程の地図を詳しく掲載している。  
 現代の地図に芭蕉先生が歩いたであろう  
 道を推測して表示してある。『週刊おくの  
 ほそ道を歩く』角川書店刊、は「大人の  
 休日芭蕉とめぐる二六〇〇km」と銘打っ  
 てあるが、地図などは金森敦子著のもの  
 と同じである。残念ながら、当時の企画  
 発行者なので現在では入手できない。峯  
 雲も購入を逸失した号がある。  
 しかし、一番に必ず必要なものがある。  
 それは、最新の道路地図帳、各県版が望  
 ましい。前述の参考書でも詳細な地図で  
 はない。歩くためには、コンビニの所在(飲  
 み物やおにぎりを購入するだけではなく、  
 トイレが必要)、行き帰りのためには駅、  
 バス停の所在が不可欠。そもそも、自分  
 がどこにいるのかを常に確認しなければ  
 ならない。まあ、山登りに近いと思えば  
 良い。従って、持ち物も山登りを想定し  
 てザックに入れば間違いない。ここで  
 は、くどくど説明しないが、ここから先  
 の極細道の中で参考になる場面が出てく  
 るかも知れない。

さあ、いよいよ二六〇〇kmの長旅の始

まりである。峯雲も一〇年かけた旅を終えてから、さらに一〇年近くは経っていて、記憶が定かではないので、思い出すことだけを述べて行こうと思う。多少の創作も入ってしまうかも知れないが、芭蕉先生も奥の細道ではかなりのウソを記述しているの、許して下さるだろう。

うっかり、細道ではなく横道に逸れてしまった。深川から隅田川に沿って歩いていくのだが、江戸ではない大東京、当然川沿いに土手などの歩く道はない。自動車道路の歩道をしばらくは歩くことになる。そうこうしていると我々の飲み場である浅草に近くなってくる。青空の向こうにアサヒビールの金色に輝くウンコのおブジェが黒い台に鎮座しているのが見えて来て、ああ、粕谷大人殿や村野兄殿と神谷バーでビール、電気ブランを思いつきり飲みたいなあ、酒の肴に何がいいかなあ、ビールにはまずソーセイジの盛り合わせかなあ、いやいやしめ鯖なぞの粹なものに、しかし粕谷大人殿はちょっとやそこらの酒の肴では許さないだろうな。などと想念の湧くに任せていると吾

妻橋の袂に辿り着く。

ところで、浅草の神谷バーは我々悪友たちの飲み場の一つで、粕谷大人などは幼少の頃から入り浸っていたという。

というのは、彼は今は極楽におられる親父殿と一緒に行っていたからで、本格的に飲み始めたのは高校一年からとのこと。我々文学少年がいつも、ドストエフスキーやジイド、スタンダールなど高尚な議論をしていたのに、議論の後、こやつは自分だけこっそり酒を飲みに行っていたのか。未成年の不届き物め。

浅草は我々にとって庭の遊び場のような処で、話は尽きないが、神谷バーの従業員に「あべちゃん」という温和な顔つきの端正な浅草老紳士がいたことを記しておこう。彼は、我々が高校生の頃からすでに店で働いていて、未成年でも追い返すことなどなかった。ほんの数年前まで正面横の売店で電気ブランを売っておられたが、今は引退されて時々顔を見せられるくらいになった。寂しい限りである。

この辺りは隅田川の護岸の下にコンクリートの広い三和土が続いていて、水辺の傍を歩くことが出来る。がしかし、ブ

ルーシートで我が家を囲っている住所不定者が秋刀魚など焼きながら、

「——男ありて

今日の夕餉にひとり

さんまを食ひて

涙をながすと。

さんま、さんま、

さんま苦いか塩つばいか。」

などと嘯いたりするので、調理の邪魔をしないように避けて行かねばならない。たまたま、ボサボサ頭で髭ボウボウの老紳士と目が合ってしまった、

「おい、あんちゃん。おめえは何をしているんだ。」

「ただ、歩いているだけです。」

「何だと、川つべりを歩かねえでちゃん

と道路を歩け！」

そっちこそ川つべりにボロ小屋立てて住んでじゃねえと心の中で悪態をつきつつ、

「どうも夕飯の準備のお邪魔をしますません。」

と早々に先へ向かう。

隅田川を真っ平らな水上バスが波音を立てて通り過ぎて行くが、東京へ出張に来た札幌の永川座主と吾妻橋からこの船に乗

り、下流に向かって川風に吹かれたことがあったけなあと感慨に浸っている場合ではない。千住までは、まだまだ、距離がある。しかし、夕闇が迫り、辺りが暗くなるかも知れない、などとはウソである。浅草界隈は永井荷風先生の頃から、一大繁華街でネオンサインが煌々として昼間のように明るいのだ。キレイなストリップ嬢に囲まれてご機嫌な荷風先生。川辺で汚い無宿者からまれた峯雲。小説の「旅の重さ」は巡礼旅だったけ、なほどおくの細道旅も似たようなものか知らん。

さて、千住で芭蕉先生は船を下りたところあり、確かに意外に大きい千住大橋の傍に矢立の句碑が建てられてあった。されば、粕谷大人や草野先生は昔、南千住にお住まいであって、よく遊びに行つたが、ここから近いのではないかなどと思いを巡らす記憶は白い霞の中。

ここからは千住大橋をわたり、日光街道を行くのだが、峯雲は毎度与野庵へ帰庵するので東武線の駅に辿り着くように歩くことにした。

ここで突然ながら、書いているうちに、

是非とも述べておかななくてはならないことが頭に浮かんだ。下卑た話だが、糞尿についてである。なぜ、浮かんだのかは不明だが丁度トイレに行きたくなったためかも知れない。歩き旅でもっとも苦労するのが、糞尿を催した場合である。コンビニなどが遠く、切羽詰まった状況の時、どうするか。当然、読者は野糞を思い浮かべるであろうが、まさにそれしか方法のない場合もある。近くに人家があれば、「お願いします、トイレを貸してください」と駆け込むのも一方法ではある。

しかし、現代において「奥の細道旅をしております、どうか、トイレを」と懇願した時、「何で、家を出る前に用足しぐらいいしてこないのだ、駅か公衆トイレに行けばいいではないか」とお叱りを受けるかも知れない。はて、芭蕉先生はどうしたのだろうか。当然のことながら、江戸時代には駅トイレも公衆トイレもない。峯雲は、先の参考書などを読み返して見たが、奥の細道での芭蕉先生の糞尿について書かれている本はなかった。

確かに、「奥の細道」には「馬の尿する枕元」は俳句として書かれているが、芭

蕉先生自身の糞尿については流石に記述はない。世の先生方は、芭蕉先生の作品のただけに気を取られていて、その解釈ばかり研究なさっておられる。実際に、歩いてみれば、糞尿という日々の大変な人間肉体现象が現出するのである。さて、ここに糞尿という言葉がいくつ出て来たであろうか。テレビのクイズ番組ではないが、この糞尿が峯雲のおくの極細道旅でも最も悩ましたテーマの一つだったのである。

ちなみに、火野葦平は小説『麦と兵隊』で有名なのだが、実は『糞尿譚』で芥川賞を受賞したのである。芥川賞を受賞するほどの文学史上、燦然とウンコ色に輝く大テーマなのである。ご興味のある方はインターネットの電子図書館の青空文庫にも公開されているのでお読み頂きたい。

或る日、おくの細道の旧道を歩いていた時、急に催してきたが、近くに人家もなければ、ましてコンビニなどない辺鄙な処である。我慢しながら歩いてみるとふと小さな神社が目についた。神社の裏手に回ると藪が茂っている。凶らずも、敵地の中の壕に入ったかのような安心感が出て来て、人目につかず、ここなら藪の中に入り、用



足しをしてしまった。しかしながら、神様の居住地で誠に不遜な行為、もしかすると神罰が下るのではないかと恐れおののき見かえると我が排泄物が厳然と存在している。慌てて、木枝を折り穴を掘って埋めたのだが、我が排泄物もトイレットペーパーもいづれ自然に帰る、おそらく神様が旅の愚僧の窮地を救うため、この小さな神社を提供して下さったのだと勝手に納得した。

その当時は、東北大震災前で携帯用の簡易トイレ袋など知らなかったが、今ではザックに入れられるものもあるので、活用すれば神罰の恐れもしないで済むと思われる。この文を食事時にお読みになっていないことを祈る。

さてこの先、日光近くがまた、大変な道のりになるので、その時は細心の注意が必要である。この辺りから東武線沿いは、ほぼ東京への通勤者のベッドタウン、住宅しかないようなところで、草加以外に見るべきものもない。と言っても、草加で記憶にあるのは道路沿いに旧道を横して人工的に作った歩道ぐらいのものである。国道四号線を北上、佐々木先生の

居住する越谷を抜け、春日部に至る。おくの細道には粕壁となっていて、確かに電柱の住所表記を見るとこの粕壁の文字が書かれていて、江戸時代の名残が見て取れる。

春日部には、俳句会同人の平間夢響宗匠がお住まいで、度々春日部市の美術展覧会を見学させて頂いている。宗匠は日本商業書道協会の会長で、酒や味噌、煎餅など和風食品の一流メーカーのラベルや贈答箱などの文字を制作されている。また、ご自分の書の作品をニューヨークとパリで毎年個展を開かれており、ニューヨーク市長が五万円で購入してくれたとのこと。購入金額は全てニューヨークの子供福祉に寄付しているという。そんなことはどうでも良いのだが、とにかく加藤楸邨先生が教師をしておられたという県立春日部高校を後に、どんどん北上する。加藤楸邨先生は、水原秋桜子先生主宰の俳誌『馬酔木』を、峯雲が私淑する石田波郷先生と一緒に机を並べて編集なさっていた。共に「人間探求派」と言われ、両方が昭和俳句の巨星である。簡単に言えば、「単に花鳥風月を俳句にすれば良いと言うものではない、俳句は人間生活に根ざした

心の表現である。」と何だか芭蕉先生に近いようなことを主張されていて、まさに俳句の神髄を実践されたのである。ちよつと褒め過ぎか。

ようやく栗橋で、国鉄、ではなくて民営私鉄ジェイアール宇都宮線に合流し、与野庵へ早く帰れるようになる。栗橋には静御前の墓があつて趣きあるかと思ひ、立ち寄つて見たが義経との色恋も感じられぬ粗末なものだった。

間々田と言う地名は、おくの細道本文には出て来ないが同行會良の旅日誌に記されている。小山の手前で、自分の知らない地名にも関わらず何故か気になって地図を何度か確認したりしてから通過した。今では、全く記憶にない処である。出来るなら、再度行つて見たい地の一つではある。意外と何も無い処かもしれないが。

間々田を述べていて、参考図書で忘れたものがある。やはり、おくの細道の本文は携行すべきで、当たり前過ぎて失念してしまつた。

峯雲が携行したのは、『おくのほそ道全訳註』久富哲雄著（講談社学術文庫）である。理由はさほどのことではない。後ろのペー

ジに旅程の付図が付いていたので、芭蕉先生が泊まったところを表示してあるのかと思っただけである。間々田もこの付図に表記されていたので、意外と重要かと思っただけかも知れない。各人各様、好みの文庫本を携行すればよいのである。あくまでも、研究のためではなく実際に自分が歩くためなので。

さて、間々田を過ぎると小山ということになる。事物風景などすっかり忘れてしまった峯雲なのだが、間々田の手前の古河について何か少し述べておかなければ高校時代の悪友、今でもお付き合いしている川上宏先生に申し訳ない。川上先生は現在、この古河にお住まいである。

古河と峯雲との関わり合いを記しておこう。古河にはヤマザキナビスコというお菓子の会社の工場がある。峯雲はこのヤマザキナビスコから会社案内の制作を依頼されたので取材や写真撮影など何度かお邪魔させて頂いた。チップスターや今はブランドを手放したらしいリッツ、オレオなど馴染みのお菓子を製造していた工場である。まあ、工場中が甘ったるい匂いの充満する工場なのだが、設備は

驚くほどの最新鋭のオートメーションであった。何しろ、お菓子の製造の種類を変更するのに、三〇分でラインを変えてしまおうという、とんでも八分歩いて十分というほどではないけれど驚きのシステムだったからである。工場長から好きなだけ出来立てを食べてくださいと言われたけれど、こちらら辛党の峯雲なのでお菓子など腹一杯食べる気などしない。まして、空気がそのまま甘いお菓子のようなもので、さっさと古河の駅前の赤ちようちんにでも行きかけた気持ちである。同様のオートメーションは業種は違うのだが、鈴鹿のホンダの下請け会社の工場でも見た。

ホンダの車のシャーシーを製造している会社だったが、やはり会社案内を依頼されたので数回取材に行った。鉄板をプレスしてガンガンと車のシャーシーを作っているのだが、繋ぎ合わせる溶接は全てロボットである。機械のプレートを盗み見たのだが、プレス機は日立造船、ロボットはフアナックというしろものだった。何と、プレスは二〇〇〇トンの圧力である。といっても読者には分からないかも知れないが、船でも二二〇〇〇トンはちょっとしたものである。

人間はただ、止まったロボットを直してまた動かしているに過ぎない。そう、人間はロボットに使われているのだ。

ここで、極めて珍しいものを内緒で見せてもらった。今ではすでに生産を中止していると思われるホンダのスポーツカーNXの半製品だった。ホンダNXはホンダの最先端技術を投入した総アルミのシャーシー、ボディのウン千万円のスポーツカー。当然軽いわけで馬力の割にかなりのスピードが出る。ところが、アルミは溶接出来ない。さて、組み立てはどうするか。よく見ると全てボルトで締めてある。そう、全て人間の手で組み立てていたのである。聞くと、受注生産で月に数台が限度とのこと。傍らで、フルオートメーション、傍らでエッチラコッチラの手作り。何がなんだか、日本の近代化はこんなものかと峯雲はバカバカしく思った。

峯雲のおくの極細道は、文明批評のつもりではないが、行く先々での思い出や感想を素直に記して行こうと思う。

次の小山の町自体には風物の記憶はないが、ここはJR水戸線とJR両毛線が

出ているターミナルなので峯雲が観音様巡礼の札所巡りする際には幾度となくお世話になった駅である。坂東三十三観音巡り、関東八十八観音巡りともこの小山は外せない。東北新幹線が停車する駅だからである。さらに、句会で焼き物の益子や笠間などへ行ったときにもこの小山は大変助かった乗り換え駅なのである。

ここから国道一八号線で、壬生へ行く途中に大変重要な？「室の八島」がある。芭蕉先生も詳しくはないが、少し様子を書いている。訪ねて見ると何のことはない、掃除も行き届かぬ汚い大神神社という処に過ぎない。なおかつ、書かれているミニ池もミニ社も峯雲の与野庵の廃池より小さく有難味など全くなし。

ここで読者諸子に、はつきり言っておこう。芭蕉先生が訪れたところは、ただ先生が行きたかった処に過ぎず、芭蕉先生訪問の史跡と言うに過ぎない。行つて見れば分かるが、感慨、感傷、果ては涙を落とす程、など有る訳がない。どこも、芭蕉訪問地を笠に着た、観光客目当ての俗物商売土産屋か、手入れなど面倒臭いと放っておかれた蜘蛛の巣の掛かった廃

屋に近い小屋があるばかりである。ゆめゆめ、夢を描いて行こうなどと思わぬことである。幸い、峯雲は史跡観光などもともと意図しておらずただ、ひたすらに大垣まで歩き通すことのみを目指したので、糞尿の苦勞以外少しも心を惑わすことはなかった。

壬生であるが、おもちゃの町と看板にある処である。峯雲は壬生を京都の幕末の合戦地と取り違えていて、何かあるのではと期待して町に入ったが、これが全くの勘違いであることが分かった。映画の題名の「壬生義士伝」が頭にあつたからかも知れない。ことほどさように、無知無分別の俗人の峯雲は、勘違いをしつつ、日光の同じく無智無分別ではあるが、正直者の何とか「五佐衛門」の処に向かつて行く。この先東武日光線沿いに北上するが、宇都宮からのJR日光線が段々近づいて来て、日光へ向かう日光例幣使街道は丁度この二つの路線の間になる。その入口のような処に鹿沼があるのだが、峯雲はおくの極細道行脚の終わったあとに再度、鹿沼に行ったことがある。何のために、わざわざ行ったのか。実は家でテレビを見ていた時に、たまたま鹿沼

のニラ蕎麦を紹介している番組をやっていた。行脚の時には、ただ素通りしてしまい、巷では有名ならしい鹿沼のニラ蕎麦を食す機会がなかった。うーん、残念だと思つたら矢も楯もたまらず、すぐに電車で鹿沼に向かったのである。幸い、休日の午前中の番組だったので、午後には鹿沼市に着いた。ところが、テレビで紹介している蕎麦屋は鹿沼市と言っても駅からかなり遠い。東武日光線の楡木駅からゴルフ場の鹿沼カントリークラブを横切つて行った先である。いやはや、象の耳かきを一生懸命ブン回しているおっさんだのおばさん、いや妙齡の金持ちお嬢様を横目に歩きに歩いて行く。しかし、日本の国土はどうして丘陵地という丘陵地がゴルフ場になつてしまったのだろう。確かに、田畑などは平坦地で、作つたところであまり面白味のないゴルフ場にしかならない。多少なだらかな凸凹があつて、雑木林を切り開き、芝を貼れば、ゴルフ場などは瞬く間に一丁上がりである。栃木や茨城、千葉、その他高速道路で一時間ぐらいで行ける関東近県はゴルフ場の花盛りである。札幌の誰かが言ってい

たが、寒くなった頃にゴルフをやりに行ったら、フェアウェイに氷が張っていたのか、シベリアのような凍土になっていたのか、ボールがどこまでも転がって行ったとのこと。そんな寒い北海道で、ゴルフなんかやるなよ。

ゴルフ場を過ぎてからしばらく歩くと、漸くソバ畑の近くに目当ての店があった。早速、ニラ蕎麦を注文するとすぐに出てきたが、もり蕎麦の上に茹でたニラがたかだか乗っかっているだけである。ざる蕎麦は刻み海苔がかかっているが、ニラ蕎麦はニラがかかっている。疲れて行ったわりにはがっかりした。当たり前と言えば、当たり前かもしれない。その後、テレビの紹介が効を奏したのか、グルメ雑誌などにも取り上げられ、鹿沼の中心地にニラ蕎麦ののぼり旗が風に舞うようになった。ご賞味したい方は、峯雲のように何も遠いところではなくとも、鹿沼の駅前辺りでどうぞ。

さて、これから大きな杉が延々と続く並木道の日光街道を行くのだが、片道一車線の狭い道を車がビュンビュン走っている車道はとてもしゃないが歩けない。

杉並木の外側に歩道らしきものはあるが、落ちた枝や葉っぱで地面が見えない。峯雲は家を出るのが遅くなって、この杉並木道を日が暮れてからも歩くはめになった。街灯もない真っ暗闇である。少しでも広くて見やすい車道を歩いた方が良いと思つて、てくてく進んでいたら、何とライトが怪物の目のように見えるダンブカーが正面から襲つて来た。慌てて、自分より大きい杉の大木の間を避難したが、とんでもない街道である。つまり、日光杉並木道は江戸時代からさほど変わっていないので、昼間の明るい時間にしか歩いてはいけない道である。いや、昼間でも極めて危ない道である。「嘘だと思つたら、食べて見てください」のマルちゃん正麵の役所広司ではないが、写真などで調べて見てください。早々に、文挾という駅に駆け込んだが、林の中の山小屋のような駅舎。いつ来るか分からぬ一時間に一本のJR日光線、街道も街道なら、不便なローカル鉄道は、日光を目玉に観光立国を目指すとはとても思えない。日光駅へ向かう途中の坂のある山あいのようなどころのカーブの端に在った蕎麦屋

で昼飯を食べたが、そこのおばさんに日光街道を歩いて来たと言うと「あんたはバカか、あんな車が危ない道を今どき歩く人なんか誰もいないよ。」と呆れられた。おいおい、そう言われたんじゃ、おくの細道旅は、歩きでは成り立たないじゃないか。冗談じゃない。ここで、読者諸子で賢い方は気が付き始めたであろう。おくの細道研究家や学者がおくの細道知らずであることを。彼らは、本当はおくの細道など実際に歩いていないのだ。ただ、自動車などで要所だけ見学しているに過ぎない。ウソと創作が入り交じった芭蕉先生の本文とピンポイントで眺めた史跡を元にもっともらしくご自分の説をご披露している。ちよつと言い過ぎだろうか。

ところで、峯雲がおくの極細道を終えたあとしばらくして、日経新聞の記者が実際に歩いて連載記事を書いていた。読んで見ると峯雲と同じように風物や史跡の紹介ではなく、歩き旅とはどのようなものかを自分の体験を中心に細かく説明している記事である。さすがジャーナリストは視点が違う。と感心して読み進めたのだが、少しがっかりした点がある。



かなり先の北陸道あたりになった時に峯雲の状況を述べようと思うが、この記者は危険すぎるので諦めてタクシーで通過した処がある。つまり、この記者として歩けずに端折った場所があるということである。

さあいよいよ、日光に入った。峯雲としても一段落の気持ちになったことを覚えていいる。何たって、目には青葉山時鳥初松魚ではなく、「あなたふと青葉若葉の日の光」の日光である。芭蕉先生は掛詞、いや掛け俳句、いや洒落俳句が上手なようだ。もとは談林派、諧謔趣味もなかなかと見た。芭蕉先生は、ここで「仏五左衛門」の処に泊まっているが、峯雲も一体仏五左衛門の家はどこかと興味があったので探してみると、どうも普通の私有地で句碑なども庭にあるので憚り多くて遠慮した。日光については東照宮を始めいろいろ思いもあるはずなのだが、記述がほとんどない。峯雲も観光に来た訳ではないので、特にお参りもせず、見たかった「うらみの滝」へと向かった。日光の

観光地から三、四キロ先のかんりの道のりである。滝のふもとに駐車場があり、数台の車が止まっていたが、この先は歩きで行くしかなく、結構険しい山道の登りである。息を継ぎながら、やっと滝の見える処に着いたが、数人の客がそこでただ滝を眺めているだけである。峯雲は「暫時は滝にこもるや夏の初」を実践したので、さらに崖を這いつくばりながら滝の近くへと上がっていった。さて、滝の裏側へと足を進めると頭の上から水を被るような狭さで、うっかりすると足を踏み外して滝壺へ落ちてしまいそうである。なるほど、こんな危険な裏側へ来る人などいないわけだ。しかし、「うらみの滝」なのだから、滝の裏側から水の流れ落ちる様を見なくては話しにならないではないか。飛沫を浴びて、慌てて退散。本当に芭蕉先生は、滝の裏側に行ったのだろうか。そんな酔狂なことをしたとは思えない。やはり、観光客と同様に滝を眺めてあの漢文調の文をしたためたに違いない。

ここ日光から那須の黒羽へ向かうのだが、JR東北本線の矢板駅まではかなり交通が不便な道で、距離も相当ある。この間には船生、玉生などの曰くありげな地名の処を行くのだが、峯雲はとて一日では歩き通せず、バスを利用することになった。昔は東武矢板線が日光から矢板まで走っていたらしいが廃線になってしまっている。二時間に一本程度しかバスがない。人のほとんどいない村道を歩いていると不審者に思われかねないが、峯雲はこういう場合、村人に会ったらバス停はどこにあるのか聞いたりにして旅行者を装う。いや、本当に旅行者なのだから別にウソをこいている訳ではない。道路地図を手に持ち、カメラなど肩から下げて歩けば完璧である。が、実は写真など撮っている余裕などないことを申し述べておこう。歩き旅は意外と時間がない。のんびりしていると与野の庵に帰れなくなってしまう、翌日の出勤に差障りが出してしまうかねない。とにかく、とつとことつとこ前へ前へと歩くことが肝要である。

矢板から大田原、黒羽へも鉄道はない。

まさに、那須野原の野越えである。当然、野飼の馬などありませんよ。バスをご利用ください。峯雲は黒羽では芭蕉先生と同様にあちこちと見学して回った。浄坊寺、桃雪邸跡、犬追ものの跡、玉藻稻荷神社、那須神社、桃翠宅跡、修験光明寺跡などである。ここには観光客向けに、芭蕉の館なる観光施設があり、お土産など買う以外に芭蕉先生の書き物や資料もあって勉強になる。また、黒羽には鮎で有名な那珂川が流れていて、梁漁による鮎の塩焼きなどが美味しい。と旅番組などで紹介されているが、この時は時期ではなかったので賞味出来なかった。

さて、ここから雲岸寺への道のりは結構遠い。「若き人が多くいて、うち騒ぎながら」行けば気も紛れようが、こちららは寂しい一人旅、しかも日が傾いて来た時間、早く寺に辿り着かないと夜になってしまう。気が急ぐばかりである。

雲岸寺へ着くと寺の前の朱塗りの反り橋の何と美しいことか、誰も観光客のいない森閑とした中で、山の緑と寺の古風



な佇まいが相まって、薄暮れた風景の中にくっきりとした色彩を放っている。峯雲は旅の中で、朱塗りの橋は、先ほどの日光の神橋などいくつも見ているが、この雲岸寺の朱塗りの橋が一番美しいのではないかと思う。インターネットなどで高覧ください。時間が無かったので、後ろの山や仏頂和尚の旧居跡などは見学を諦めた。誠に残念。

那須湯元へは、黒磯からずつと林の中の那須街道を北上する。特に記憶に残るものなし。別荘地らしく、ところどころに洒落た作りの家があるばかり。那須湯元の殺生石もさほどのものではない。火山ガスの臭いを嗅ぎに行きたい方はどうぞ。「蜂蝶のたくひ真砂の色の見えぬほどかさなり死す」などは全くありません。峯雲は温泉に入りに行った訳ではないので、むしろ早く芦野の遊行柳を見たかった。田んぼの中のかなり大きな柳のところへ畦道を辿ると柳の傍に休憩用のベンチと投句箱が設置されている。ベンチに座り、投句用紙を見ていたら、思わず何

か書いて箱に入れて見る気になった。そこで、「夕ぐれに芦野の里の柳かな」と書いて投げ込んでおいた。すると一年ぐらい経ってから、那須町役場から俳句を書いた木の絵馬（写真）が送られて来た。何でも役場に飾っておいたので、作者にお送りします、とのこと。丁寧なものである。峯雲はこういう心遣いが好きである。選者が黒田原の市川草杖氏とあるが、どのような俳人か不明だ。草の杖とは如何にも細くて弱過ぎるように思うのだが、字が違うのか。読者でこの字が杖でなく他の文字と分かる方がいたらご教授願いたい。

木の絵馬（写真）の話をしたところで、道中の写真について峯雲の意見を述べておこう。峯雲も最初はデジタルカメラを持って歩いてた。写真家ではないけれど、撮影して何か残しておくこともあるだろうと思っただけである。しかし、十回も出かけているうちカメラを持つことを止めた。芭蕉先生も本文に絵やスケッチなど何も添えていない。確か、与謝蕪村は画家でもあるので、「奥の細道画巻」なる作品を残して

いるが、兵庫の豪商の求めに応じて作成された作品で、「奥の細道」の全文を書きし、一三点の挿画を添えた自筆の創作画卷である。では、芭蕉先生は何も視覚的なものは残さなかったのであろうか。いや違う、「おくの細道」の中に表現されている俳句を読んでみたまえ。如何に鮮やかに眼前の状況を写していることか。俳句を読んで、脳裏に情景が浮かばぬ方は視覚的な想像力のない方である。芭蕉先生にとって、俳句は写真でもあるのだ。俳句でアングルを決め、シャッターを押しているのだ。峯雲は写真も止め、メモ書きも止め、ただひたすら歩き、この目で見るものを楽しみながら前へ進むことだけにした。世の方々は、旅の記録として写真を残すことが多いと思うが、それを後からじっくりと見ることがあるだろうか。話のタネにするのが落ちである。所詮、その時に十分楽しまず、これも写そう、あれも写しておこうなどと余計な作業をしているだけである。歩き旅は結構忙しい。地図を見たり、バス停を探し

たり、駅までの時間を計算したりと、とても写真を撮るような状況ではない。まづもって、立ち止まるのは休憩する時だけであり、辺りを被写体にふさわしいものはないかと思回すためなどに立ち止まらないのである。未だに、峯雲はこの歩き旅の写真を撮っておけばよかったと後悔することは無い。名所旧跡などはインターネットでいくらでも見ることが出来る。紀行文などをインターネットで見ると、まるで観光地のお土産屋で買って来た絵葉書のような写真ばかりである。まあ、ご自分や仲間などが写っているのはご愛敬だが、他人にとっては風景の邪魔にしかならず、参考にするのには不都合極まりない。というわけで、写真を撮りながら歩くことはお勧め出来ない。

芦野の遊行柳から次に向かうのは白河の関だが、白河の関は白河駅から結構離れた処にあったというおぼろげな記憶しかない。白河の関跡という石柱があったように思うだけである。白河から先へ進むには、阿武隈川を渡る。川がどんなだっ



たのかの記憶もない。須賀川の可伸庵跡までの記憶があまりないのはJR東北本線沿いの面白味の全くない国道四号線をただただ歩き続けただけだったからか。あるいは忘却とは忘れ去ることなり、真知子様、君の名は？どころか私の名は？わたしは一体誰？と危ない状況になって来たせいなのか。

ところで、ラジオドラマ「君の名は」はその後映画化されたのだが、ラジオで放送された時には銭湯の女湯ががら空きとなったと巷間に敷衍されるほどの人気番組だった。脚本家・菊田一夫の代表作である。今年公開のアニメ映画「君の名は。」と間違えないで下さい。「。」が付くのと付かないじゃ大違いです。放送された一九五二年は、何とこの峯雲の生まれた年ではないか。忘却と峯雲とは不思議な縁があるのである。そんなことは、どうでも良い。

須賀川にある可伸庵跡の話が済んでいない。ここを訪れた時の印象を述べよう。小さな休憩所のような可伸庵跡であるが、静かで落ち着いており、栗の木も石碑もある。

さて、芭蕉先生がここで詠んだとされる「世の人の見付ぬ花や軒の栗」の句であるが、ものの本によると二回も推敲を重ねているという。最初の句が「隠家やめにたゝぬ花を軒の栗」次に直した句が「かくれ家や目だゝたぬ花や軒の栗」そして、辿り着いた最終句が最初に上げた句。

どうだろうか。読者諸子に俳句というものの微妙な味わいや侘び寂がこれらの句の違いで感じられるだろうか。峯雲の独断と偏見による芭蕉先生の修正していった意図を述べてみよう。一回目の修正は「かくれ家」とひらがなにして、如何にも隠棲坊主の住まいと直接的な表現を避けなかったことと、人の目に触れにくいという表現を「目だゝたぬ」と次の「花」に掛り易くした。さらに、「を」を「や」に変えることによって「花」を強調した。

栗そのものは秋の季語であるが、栗の花は夏の季語である。実際に栗の花を何か写真でご覧頂きたい。誠に派手さに欠ける素朴そのものの目立たぬ花である。さて、では何故に二回目の直しをしたか

ある。ここで、ポイントは「世の人の見付ぬ花」と修正した理由が、芭蕉先生が奥深い心情を表現したかったある転換が湧き起こったからに違いない。つまり、「栗の花」は栗の花と同時にこの軒の庵、いやここに住んでいる「隠遁僧の可伸」をも指し示したかったからに他ならない。勿論、解釈は句を読んだ方が様々に思い描けば良いのである。しかし、栗の花を知らず、情景も脳裏に浮かんで来なければ俳句は楽しめない。

さて、長々と俳句講釈を連ねて来たが、最後に、この須賀川には、素晴らしいジュエリーショップ『エリオ』を開いている田村朝美さんがいらっしやることを書き添えておく。この「水源地」に詳しく紹介されているので、お近くに行かれた方は是非立ち寄って上げて頂きたい。

漸く、みちのくへ入ったところだが、峯雲も書き疲れたので、おそらく読者諸子も冗長な文を読み疲れたと思うので、この先まだまだ長い旅は次回の「水源地」、発行出来ればの話だが、続けたいと願う。